



THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会  
宣教110~120周年  
標語

共に生きる  
いのちの天幕を  
広げよう

1963年9月20日 第3種郵便物認可 (毎月一日発行)

2022年10月1日 (土) 第820号

発行所 福音新聞社 (1部100円)  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3202-5398 info@kccj.jp  
発行人/ 中江洋一・編集人/ 金柄 鎬  
印刷所 青丘文化社

説教

# 本質と非本質

＜ヨハネの手紙一 4章18-19節＞



李相徳 牧師 (三次教会)

コロナ時代が2年半以上続きつ、他の社会分野と同じように、キリストの体である教会にも相当な変化がありました。教会はやむを得ず会の回数を減らし会計を減らさざるをえません。非自発的なダイエットにより、ある教会は存立そのものが厳しくなる事例もありました。しかしありがたいことに、私たちは教会の本質が何かを考える機会も得ました。

約25年前、神学生時代に読んだディートリヒ・ボンヘッファーの『獄中書簡集』を最近再び読んでみました。第2次世界大戦の時、ナチス支配下の刑務所で書かれた彼の文章の深さが、コロナ時代、少しの不便さと寂しさを覚えていた私にもピンと来ました。ボンヘッファーは『獄中書簡集』の44年4月30日の手紙に、「宗教がキリスト教の一つの衣服に過ぎず、その衣服も様々な時代に様々な姿を示したなら、非宗教的キリスト教とはどのようなものだろうか」「私たちが答えるべき質問は、こういうことではないだろうか。非宗教的な世界において教会、教区、説教、礼典、キリスト者の生活が何を意味するのか?」「神さまについて世俗的に語るにはどうすればいいのか?」と書きました(『獄中書簡集』の引用文のすべては韓国語訳本からの私訳である)。

上に引用された文章は、コロナによって礼拝の一時中止、短縮礼拝、非対面礼拝、聖餐式の延期、礼拝後の食事会の省略、祈祷会の中止、小グループの会の中止などを経験したことがあるか、今も経験している私たちに、示唆するところがあります。対面礼拝の時間にずっとマスクをしなければならず、スマホを見ながら礼拝するなど、慣れた信仰的なルーチンから外れるしかないこの時期に、私たちは信仰の非本質ではなく本質をチェックするように導かれます。

『獄中書簡集』の44年5月に書かれた次の箇所を引用します。「この数年間、自己保存が目的のものかのようにそれだけのために闘ってきた私たちの教会は、人間と世界を和解させて救ってくれる御言葉の担い手になれず、その結果、過去の御言葉は力を失って沈黙せざるを得なくなった。こんにち、私たちがキリスト者であることは、次の2つ、つまり祈ることと人間の間で正しいことを行うことにのみその本質がある。」

こんにち、私たちの教会は自己保存のための活動が多かったのかもしれませんが。私たちの活動は方向を失い、私たちを温室の中で育った草花にしたのかもしれませんが。神の国は言葉ではなく力にある(コリ一4:20)のに、私たちは塩味を失った塩(マ

5:13) のようになったのかもしれませんが。私たちはあまりにも多くの仕事をしてきたのかもしれませんが。「必要なことはただ一つだけである(ルカ10:42)」。私たちは非本質なことに対してはもう自由になっていいです。本質に忠実であれば十分です。ボンヘッファーが提示したキリスト者らしさの本質は、祈ることと正しいことを行うことでした。神への愛と隣人への愛と言い換えてもいいでしょう。その他のことは少し違っても大丈夫です。


「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです(ヨハネ一4:19)」。私たちは愛するように召されました。愛の対象は誰ですか。神と隣人です。そして、この隣人の境界はありません(ルカ10:36)。もちろん私たちは知っています。私たちの愛がどれほどつまらなくて軟弱なのかを。しかし、私たちの愛はまず私たちを愛してくださった方に基づいた愛です。それについて、ボンヘッファーは44年8月21日の手紙に、「すべては『キリストにおいて』にかかっているようだね。私たちが当然、神さまから期待し、切に求めてもいいものは、全てイエス・キリストにおいて見つけられる。」と書いたのです。このイエス様の愛が私たちの恐れを締め出します(ヨハネ一4:18)。だから私たちも、胸を張って愛することができます。

私たちは毎年10月、マルティン・ルターを思い出します。マルティン・ルターは当時の教会が非本質にとらわれていて、本来の本質を忘れたことに対抗し、本質を叫びました。宗教改革精神の継承は、形式ではなく本質です。外側の包装紙ではなく、内側の中身です。イエス様の受肉、十字架、復活を通して私たちに与えられた神の国の本質は変わりません。

それゆえ、環境によって様々な様相を呈する非本質な部分は少し違っても大丈夫です。礼拝形式が少し変わっても大丈夫です。礼拝時間が少し短くても大丈夫です。食事の時間がしばらく省かれても大丈夫です。オンライン礼拝に参加しても大丈夫です。礼拝資料を見ながら一人で礼拝しても大丈夫です。献金額を少し減らしても大丈夫です。

主は私たちの心の中をご覧ください。ただ、私たちの日常生活で主に愛されている者らしく歩めば十分です。祈りつつ正しいことを行えばいいのです。主はどんな環境の中においても私たちを神の国の本質へと招いてくださいます。

**韓日対照讃頌歌販売**




韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

- B6版変型・1483ページ
- 価格:2,500円(消費税・送料込み)

※お求めは総会事務所へ

**講壇掛・ストール販売**



在日大韓基督教会ではKCCJのロゴ入り講壇掛・ストールを制作・販売しています。

価格は講壇掛・ストール共4色セットで各1万円(約半額)

講壇掛・ストール両方ご購入の場合は1万5千円です。※お求めは総会事務所へ

## 韓国宣教協力教団各総会訪問 3年ぶりに参席して挨拶、協力を確認

9月13日に開催された大韓イエス教長老会（大神）総会を始め、各協力教団の総会が開催され、中江洋一総会長、梁榮友副総会長、金柄鎬総幹事が参席して挨拶を行った。コロナ禍においてこの2年間参加出来なかったが、今回3年ぶりに参席し、短い時間ではあるが挨拶を交わし協力を確認した。

大神総会を除いた4つの教団総会は9月19日～23日に開催され、また各地方に分散していたため、合同総会には梁榮友副総会長が総会長の挨拶文を代読した。

訪問した教団は、大韓イエス教長老会（大神）、大韓イエス教長老会（合同）、大韓イエス教長老会（統合）、韓国基督教長老会、大韓イエス教長老会（高神）など。



関西地方会

## チャペルコンサート開催 多彩なプログラムで70人が集い大きな恵み

関西地方会教育部主催のチャペルコンサートが、7月24日午後、大阪教会で開催された。会場には、教会学校生徒たち20名を合わせ70名近くが集まり、YouTube同時ライブ配信の視聴があった。

「音楽のおくりもの～新しい歌を主に向かって歌え」と題したこのコンサートは、金由香（パイプオルガン）、金明美（ソプラノ）、呉多美（ピアノ）の演奏者による最高の演奏が迫力いっぱい披露された。

また、パイプオルガンの演奏と共に、「マーロンおばさん」の絵本が大画面で映され、楽しい朗読の時間、讃美歌「主イエスは誰でしょう」が<ルソーの夢>による変奏曲に由来するとの讃美歌史も紹介される盛りだくさんのプログラムだった。

さらに、このメロディーに乗せて、4教会学校（大阪、布施、堺、京都）の生徒による創作讃美も動画にて披露され、教会学校生徒も参加してのコンサートに大きな拍手が贈られた。

現在のコロナ禍の中でもこのような交わりと発信をさせて下さった神様に心からの感謝と讃美をささげたい。

（関西地方会 教育部 仁尾圭子伝道師）



中部女性会

## 3年ぶりに一日研修会開催 金炯振牧師を講師に2度にわたり講演

全去る9月8日（木）に中部地方教会女性連合会の一泊研修会が名古屋教会で行われた。3年ぶりの開催となり、北は長野、南は豊橋まで、合わせて6教会の牧師、信徒（総27名）が集った。

千曲ビジョン伝道所の金炯振牧師を講師に迎え、「聖書の中の女性」というテーマに沿って二度の講演を聞いた。一部では「ガラスの天井」と題し、この世における女性の現状（賃金の格差や国会議員の男女比など）、また社会のみならず、教会も女性に対する認識が偏っているということ、ご自身も子育てをする中で気づくようになったと証しを交えて語った。

昼食を挟んで二部では「この世を生かす女性」と題して、日本の地における移住女性として生きてきた信仰の先輩を小説の『パチンコ』に重ね合わせつつ、聖書に描かれている女性たちの生き方、神さまからの用いられ方を語られた。講演を通じて、参加者は苦しみの中にあっても励ましてくださる神さまの存在に気づかされた。

2020年に日本に来られるも、コロナ禍のためにほとんど面識のなかった金炯振牧師との出会い、3年ぶりの開催、「現在の教会は世間よりも女性差別が強いが、過去の韓国教会はそうでなかった」というお話、そして感染に気をつけながらも一緒に囲んだ美味しい昼食…。嬉しく、楽しく、美味しい研修会だった。全国女性会の石橋真理恵総務の言葉を借りてこの報告を終える。「男性も聞くべき講演である。」

（報告：中部女性会 李正子）



### <対馬めぐみ伝道所 住所変更>

〒817-0323 長崎県対馬市美対馬町大船越539-4

電話/FAX 0920-54-4500

### 宣教委員会主催異端セミナー

## 「統一教会と政治との関係から 見える宣教課題」



講師：卓志雄 司祭  
日本聖公会管区事務所宣教主事  
日本聖公会東京教区  
インマヌエル新生教会牧師

昨今の統一教会と政治との関係から私たちが学ぶべきことと宣教の課題を共に考えるために異端セミナーを開催することになりました。  
皆さん、積極的にご参加ください。

日時：2022年10月28日（金）19時～21時30分

会場：オンラインセミナー（ZOOM）※言語は日本語！  
※プログラムは講演と質疑応答となります。

対象：教役者と信徒

締切：10月26日（水）まで

申込：書記 林明基牧師（kyotoch@hotmail.co.jp）

お問合せ：委員長 趙永哲牧師（080-5318-9058）

※申請者のメールに講演の資料とZOOMリンクを送付します。

特別寄稿

## 『在日に続かれた信仰継承の歩み』

—崔永模長老から崔正剛牧師へ—

博多教会 尹善博牧師

2016年6月崔正剛牧師の名誉推戴の挨拶で「わたしは、崔永模長老から牧会に失敗した牧師と言われました。」と言われた言葉が耳に残っている。私が初めて崔永模長老にふれた言葉だった。直接お会いしたのは、教会納骨堂に納められた一際大きな骨壺である。見つめる私に「大きかろ？『骨を全部入れて』と言っとったもんねえ。」と崔正剛牧師。その言葉に「長老任はどんな方だったのだろう」と思い浮かべた。

崔永模長老を知る人たちから聞けば「温厚や物静か」という表現をよく聞いた。「冗談が好きでおちゃめ」と言った人もいた。ただ言葉は極端にその人を表してしまうことがある。

今回『在日に続かれた信仰継承の歩み』を主題に記事の機会が与えられ感謝である。西南地方会も歴史編纂委員会(活動の財源はGDavis宣教師の宣教金を積み立てたもの)があり、崔正剛牧師が第40回定期総会までの会録や資料を製本された。また第72回までの資料が整理され、現在は私が引継ぎ、製本作業をしている。その中で、信仰の先達である崔永模長老の『生きておられた神学』にふれられるからだ。

崔永模長老は1916年慶尚南道のお生まれである。36年にキリスト教(韓国長老会)に入り、対馬へ渡られた。そこで金奉奎牧師により洗礼を受けた後、福岡へ移住。1943年6月に長老に将立された。福岡教会は当時吉塚にあり、多くの韓国同胞が住み合うひとつの共同体であった。水曜祈祷会などに行かれると、他の大人たちと何時間も話をして帰って来なかったそうだ。「まっすぐな道の先に見える教会を見つめ、兄弟姉妹4人は首を長くして、両親の帰宅を待っていた」と、次男の崔白雲執事が言われていた。それは私にもよくわかる。私も祈祷会から戻る母親を弟といつも待っていたからだ。

戦中は『馬車曳き』と言い、重い荷物などを馬に曳かせ運ぶ仕事をされ、戦後は『靴を制作し、販売と修理』を営まれた。当時、小学生の崔正剛牧師は、ランドセルや手さげ袋を革で作ってもらったことを「あの時は重たいとか、みんなと違うと思って嫌やったけど、今になって見れば贅沢やったねえ」と振り返られる。

母親の南周也勳士は、人の足を見るだけで『ぴったり』サイズを言い当てられる程の才能を持ち、教会の牧師が尋訪される度に、新しい靴に取りかえられたという話を聞いた。みんな口々に「あの時は貧しかった」と言ったが、お互いに協力し合い信仰を守ってきたのだ。

やがて福岡に2つ目の教会、福岡中央教会が設立される。それは総会90年記念誌にある通りだが、福岡教会を離れていく青年たちを、崔永模長老がご自宅に招き、集い合ったのが始まりだ。そして礼拝を献げながら教会となっていく。礼拝ではいつも前に座られた崔永模長老は、いつも「尻尾になるな。頭になれ。」という言葉で祈られたが、その言葉を覚えている方も多だろう。そして、祈られるお姿を印象的に覚えている方も多だろう。

ある執事は崔永模長老と初めて出会われた時のことを振り返ってくださった。「水曜祈祷会で『久留米で働き福岡に来たが、実は韓国へ帰国しようかどうかを迷っている。』と打ち明けた時に祈ってもらった言葉と、讚美した『くらき夜あらし吹き荒れ(345番)』は、今も生きる糧となっている」という干証だ。

崔永模長老は愛餐に交わることも喜ばれていた。礼拝後はいつも「美味しいごはんがいっぱいありますから、お腹いっぱい食べて帰って下さいね。」と招かれ、時には「お昼ご飯は、午後の集会にも参加するためにあるんですよ」と『ドキッ』とするようなこともおっしゃったという。崔白雲執事が「近

くのお米屋さんの経営を支えた」と冗談をおっしゃる程、青年や留学生たちに、とにかくお米を配られた。本当に沢山の献身と奉仕をされ信仰を守ってこられた。

崔正剛牧師は、1942年福岡のお生まれである。九州大学卒業後、白木金属を経営されたが、1972年に西南学院大神学部にて学ばれた。大阪教会で伝道師、講道師を経て、1982年より熊本教会の担任牧師となられた。1991年に福岡中央教会で視務をされ、2004年には博多教会開設・委任された。2012年に隠退、2016年に名誉推戴され、按手を受け今日まで40年間も西南地方会で信仰を守られている。

この記事準備するにあたり「崔正剛牧師のことを書いてほしい」との総幹事の提案もあったのだが、「わざわざ、そんなことせんでいいよ。」と崔正剛牧師が言われるので、また機会が与えられればと願う(崔昌華牧師と共に金嬉老氏のいる熊本刑務所に何度も足を運ばれた話や、先日召された金信煥牧師とのお話など、それ以外にも干証の多くが、西南地方会にとって大切なお話になると思いますので、どなたか計画してください)。

だから、私にとっての崔正剛牧師を記録したい。私も、崔正剛牧師の牧会される中に生きる一人であり、20年前に結婚式の司式をしていただいた。総会長を務められている時は、総会神学生として東京調布教会におり、李相勳牧師のお手伝いで何度も集会でお会いした。その度に「神学生、頑張れ！」と祈っていただいた。

私が牧師になり福岡へ帰省する度、礼拝に誘っていただき、「よく勉強していると思います。」とメールをいただいた時は嬉しくて保存をした。博多教会へ招聘のお話をいただいた時は「博多に来てゆっくり牧会すればいい」と言葉をかけていただいた。その言葉に励まされ現在に至っている。「尻尾になるな。頭になれ。」と祈られる牧師ではないが、しかし、私のような半端な人間が今日まで生かされているのだから、崔正剛牧師は私の牧師である。

誰もが歩みの中で「信仰を継承しよう」と意味を求め歩んでいるわけではない。そんなことを考えている信仰が窮屈になるだけだろう。ただ、わたしたちが毎日をくり返して生きていると、その結果に『献身の意味』がついてくることもある。その意味に出会う時、先達たちの「生きておられた神学」が、わたしたちと過去を結ぶのだ。そして「今」こうして意味を掴んでいるのだと信じている。

西南地方会には、そのような信仰の先達たちの切り離せない福音世界がある。先達たちの歩まれた時間にも、未来と同じ希望の光が注がれている。日々を繰り返しつつ、過去・現在・未来が繋がっていくことを願っている。



# ＜第11回WCCカールスルーエ総会参観記＞(1)

## —キリストの愛が世界を和解と一致へと動かす—

世界教会協議会(WCC)第11回総会が、8月31日から9月8日までドイツ南部の都市カールスルーエ(Karlsruhe)で開催された。1968年の第4回ウプサラ総会以来、54年ぶりのヨーロッパ開催となった今回の総会には、全世界にある352加盟教団のうち295教団から4000余名が参加し、キリストに連なる姉妹・兄弟であることを喜び祝うとともに、世界教会が抱える喫緊の課題について議論し、エキュメニズム(教会一致運動)の今後の方針を定めるための協議のときを持った。

新型コロナウイルスのパンデミックによって1年の延期開催となった第11回総会は、「キリストの愛が世界を和解と一致へと動かす」(Christ's love moves the world to reconciliation and unity)という主題を掲げた。WCC総会の主題に「キリストの愛」が入るのは初めてのことである。この主題はコロナ・パンデミックの中でより顕著に現れた先進国と途上国の格差問題、経済・社会的不平等、人種葛藤など山積する課題を反映している。これまで以上に敵対と分断が加速している世界のあらゆる対立の現場において、キリストの体なる教会は「和解と一致」に向かってどのような声を上げ、行動すべきかについて総会全体の焦点が合わされた。

第11回総会の開催都市であるカールスルーエは、ドイツ西部のバーデン＝ヴュルテンベルク州に属している。バーデン地方はライン川を挟んでフランス、スイスとの国境に面しており、ドイツ(プロイセン)とフランスの間には1870年に戦争が起こっている。両国の関係が極端に悪化した状況の中で和解のために大きな役割を果たしたのが、バーデン地方の教会であった。また第二次世界大戦後に廃墟から地域社会を再び立ち上がらせ、教会を再建させる原動力となったのが、バーデン地方諸教会のエキュメニカルな関係における和解と友情であった。第11回総会のホストを務めたバーデン地方プロテスタント教会(Evangelical Church in Baden)の代表であるハイケ・スプリングハート司教(Bishop)は、「このバーデンの地に世界中のキリスト者たちが集まり、グローバルなエキュメニカル・コミュニティとしての連帯を深め、共に和解による希望のムーブメントを作り上げていくことに感動している」と述べた。

今回の総会は、今年2月24日から続いているロシアによるウクライナ侵攻の最中に開催された。WCCがロシア正教会から独立したウクライナ正教会の代表団をカールスルーエに招待したことによって、両国正教会の代表が顔を合わせ、一応「対話の席に着く」という形にはなったが、残念ながら本格的な対話の実現には至らなかった。いくつかの加盟教団からはロシア正教会のWCC会員資格を停止すべきだという意見も出されたが、WCCは飽くまでも平和を目指す「対話の場」としての意義を強調し、ロシア正教会と引き続き対話していく姿勢を崩さなかった。

9日間の総会において、世界各地から集った参加者たちに「キリストにある連帯」を最も鮮明な形で体験させた場所は、会場中央の野外広場に設置された巨大な「祈りのテント」(Prayer tent)であった。信仰の伝統と告白が異なる350余りの

会員教団によって構成されるWCCの総会においては、伝統的に「礼拝」ではなく「祈祷会」(prayer meeting)を共に持つという形が取られた。WCCの歴史において、こうした「祈祷会」は、分離した教会(教団)同士が依然としてキリストにあって一つであることを確認させ、信仰的な共通項を見出す機会を提供してきた。第11回総会においても、共に神に向かって歌い、一つの祈りに心を合わせる中で、参加者たちは互いの違いを乗り越える体験を共有した。

祈祷会での賛美を支えるクワイアは、地元ドイツとインドネシアからの参加者によって構成された。彼らは同じ人種で固まって立つのではなく、肌の色が異なる隊員たちが隣同士になって歌っていた。またドイツで活動するブラスバンドも加わり、繊細かつ力強い演奏で祈祷会の音楽を支えた。

総会の公式言語は、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語の4ヶ国語であったが、祈祷会においては、それ以外の様々な国や地域の言語で賛美と祈りがささげられた。東西南北の先住民の賛美の歌や踊りがあり、それぞれの神の呼び名で主を賛美するとき、戸惑いを覚えることもあったが、同時に不思議な開放感も味わうことができた。

リタジーの形態や音楽のセンスが異なるリーダーたちは、一つの祈祷会の中で入れ替わりながら祈りと賛美を導いた。彼らは「キリエ・エレイソン」(主よ、あわれみたまえ)、「アレレヤ」などの耳馴染みの讃美だけでなく、ナミビアの伝統讃美やエジプトのコプト教会の讃美、またハワイ原住民の讃美などを紹介し会衆をひとつの歌声へと導いた。軽快なリズムと旋律が特徴的なアフリカやラテン・アメリカの讃美を歌うときは、会衆全体が踊りながら讃美した。触れたことのない旋律、発したことのない言語ではあったが、祈りのテントに集った者の誰もがその中に溶け込んでいるイエス・キリストへの信仰と豊かな霊性を感じているように思えた。総会期間中、朝夕毎日2回ずつ持たれた祈祷会はどれもユニークさに満ちており、その一つ一つが「共生の天幕」を広げる小さな冒険のようであった。(次号へ続く)

(報告：WCC総会参加者一同)

